

漱石と虚子

——作家漱石の誕生——

(一)

明治二十五年八月、二十六才の大学生であった漱石は、帰省中の子規を松山に訪れている。これは七月学年試験終了後、夏期休暇を利用して子規と共に関西を慢遊し、その足で義姉の里であった岡山へ旅をした漱石が、その家の主人の案内で金比羅へ参ったついでに立寄ったものと思われる。

この松山訪問中に、子規の家で漱石は一人の中学生に出会った。この邂逅が偶然であったのか、子規の意図によるものであったのか、わからない。おそらく偶然ではなかったかと思われるが、どちらにしても子規が媒介となつて二人の人間が結びつけられたのである。この中学生が、当時伊豫尋常中学校の生徒（十八才）であつた高浜清、後の虚子である。

この時の出会いの様子を虚子は、大正六年「ホトトギス」に掲載した「漱石氏と私」の中で次の様に回想している。「私が漱石氏に就いての一番古い記憶はその大学の帽子を被つてゐる姿である。」「子規居士が帰省してゐた時のことで、その席上には和服

越智悦子

姿の居士と大学の制服の膝をキチンと折つて座つた若い人と、居士の母堂と私とがあつた。母堂の手によつて、松山峠とよばれてゐるところの五目峠が拵へられて其大学生と居士と私との三人はそれを食ひつゝあつた。」「その席上ではどんな話があつたか、全く私の記憶には残つて居らぬ。ただ何事も放胆的であるやうに見えた子規居士と反対に、極めてつゝましかに紳士的な態度をとつてゐた漱石氏の模様が昨日の出来事の如くはつきりと眼に残つてゐる。漱石氏は洋服の膝を正しく折つて静座して、松山峠の皿を取り上げて一粒もこぼさぬ様に行儀正しくそれを食べるのであつた。さうして子規居士はと見ると、和服姿にあぐらをかいてぞんざいな様子で箸をとるのであつた。」

この最初の出会いで虚子が漱石から受けた第一印象は、「極めてつゝましかに紳士的な態度」の「行儀正し」い几帳面な人、という印象であつた。この漱石に対する印象は、そこに同席していた「何事にも放胆的」で豪放磊落な子規とは正反対のものとして虚子に強く印象づけられ、その後の二人の交友を通して保ち続

けられる。昭和十七年に中央公論社から刊行した『俳句の五十年』の中でも、漱石の人格に言及して、「とにかく漱石といふ人は紳士でありまして、世のいはゆる道学先生といったやうなものは質を異にしてをりましたが、曲つた事、曖昧な事、うそが嫌ひで、心の底から透明なやうな感じのする人でありました。」と述べている。また、この漱石の几帳面で紳士的な態度は、具体的には、「漱石氏などは其頃から決して人の手紙に返事を怠るやうな人ではなかつた。殊に人に物を頼まれたりした場合必らずその面倒を見ることを怠らなかつた。」といった思い出として語られているのである。

この虚子から見た漱石像に対して、漱石から見た虚子像はどのようなものであつたか。この辺りについては、漱石の子規宛書簡に虚子の人物評がある。「小生が余暇な事ながら虚子にかゝる事を申し出たるは虚子が前途の爲なるは無論なれど同人の人物が大に松山のななぬ淡泊なる処、のんきな處、氣のきかぬ處、無氣様な点に有之候大兄の觀察点は如何なるか知らねど先づ普通の人間よりは好き方なるべく左すれ（ば）左程愛想づかしをなさるゝにも及ぶまじきか或は大兄今迄虚子に対して分外の事を望みて成らざるが爲の失望の反動現今は虚子實際の位地より九厘の底に落ちたる如く思ひはせぬや何にせよ今度の事に就き別に御介意なく虚子と御交誼あり度小生の至望に候（明二九・六・八）」この手紙は虚子が大学入試を一年先へのばし、漱石からの学資

援助の延期を申し出た事を知り、その学問に対するのん気さかげんに腹を立てた子規に宛てて、漱石が虚子を弁護した手紙である。漱石は虚子の「淡泊なる處、のんきな處、氣のきかぬ處、無氣様な点」に好意を感じていた。この頃の漱石は周囲の人々に、器用に立ち回る小賢しさとしつこさを感じ、それらが自分を圧迫しているという窮屈で不愉快な思いをしていたのである。

漱石が松山に都落ちをした理由は色々に取りざたされているが、漱石自身がその理由を述べたものに明治三十九年十二月二十三日、狩野亨吉宛の書簡がある。「御存じの如く僕は卒業してから田舎へ行つて仕舞つた。是には色々理由がある（中略）当時僕をして東京を去らしめたる理由のうち下の事がある。世の中は下等である。人を馬鹿にしてゐる。汚ない奴が他と去ふ事を願ふせずして衆を待み勢に乗じて失礼千萬な事をしてゐる。こんな所には居りたくない。だから田舎へ行つてもつと美しく生活しやう。是が大なる目的であつた。然るに田舎へ行つて見れば東京同様の不愉快な事を同程度に於て受ける。（傍点漱石）」

田舎での美しい生活、淳朴な里人への憧れが強かっただけに、松山で期待通りの生活の得られなかつた漱石はその反動として松山人を峻烈に批判した。漱石は東京の友人に向けて、松山人は「随分小理窟を云」ひ、「ノロマの辭に不親切」で「狡猾」である。「松山中学校の生徒は出来ぬ辭に随分生意氣」で「地方の人情は恰利の代りに少しも質朴正直の事」がないと書き送っている。

この様に松山人が漱石の目に映っている中であつて、虚子は「松山のならぬ」人物と目されていたのである。更に漱石は虚子の文学的才能を高く評價していた。明治二十九年五月、東京で文学する事を決意し上京した虚子のために、漱石は坪内雄蔵（逍遙）、狩野亨吉といった諸先輩への紹介の勞を取っている。その紹介状には、「小生友人高浜清なるもの小生朋友に紹介を求め訪問の上談話杯聞くべき人を教へ呉れよと申来り候間早速貴君の処へ宛差出候間可然御高説御聞かせ被下度願上候此高浜なるものは文学的才に富みたる男にて現に俳句杯は中々上手に御座候且人物も随分たのもしき男に御座候」とある。

漱石は虚子を文学的才能のある、性格的には淡泊で、鷹揚で、たのもししい人物と見ていた訳である。漱石にこうした虚子像を植へ付けたのは、明治二十九年春の、松山での二人の交友を通してであつた。

□

明治二十九年春、長兄の病氣看護のために松山に帰省した虚子は、松山中学校の英語教師として赴任していた漱石を、その下宿に尋ねた。この訪問は子規の勧めによるものである。ここで直接に結ばれた漱石と虚子との交友は、虚子の思い出に「私はしばしば漱石氏を訪問して一緒に道後の温泉に行つたり、俳句を作つたりした。（「漱石氏と私」）」とあるように、二人を結びつけた

人物が子規であつた事からも当然、俳句をなかだちとした交友であつた。

ここで、この当時の二人の俳句について少し眺めておくと、虚子は明治二十四年、中学五年生の時に河東兼五郎（碧梧桐）を通して子規と知り合い、俳句の手ほどきを受けて以来次第々々に俳句に没頭して行く。明治二十七年高等学校を中退し、子規を頼つて上京。この頃から子規に従つて、おのずから俳人として立つようになり、二十八年には日本新聞に俳話を載せたり、又陸羯南の紹介で雑誌「日本人」で俳句の選をし、同時に俳話を連載する様になつていた。

一方漱石は、第一高等学校の学生であつた明治二十二年一月から子規と親しく交わり、その影響下に句作を始める。そして、二十四年には子規宛書簡に「急に俳諧が作りたくなり十二三首を得たり」、「小子俳道発心」「性来かゝる道は下手の横好とやらに候得ば向後驢尾に附して精々勉強可仕（候）」問何卒御鞭撻被下度候」と自らの俳句に対する傾倒ぶりを示し、作句しては子規に斧正を請うようになる。二十五年は一時俳句に遠ざかるが、二十七年には友人宛の書簡に十五句程添えて俳句復活のきざしを見せており、二十八年には日清戦争従軍によつて旧郷の結核を悪化させ、静養のため帰郷した子規が、漱石の下宿に同居した事によつて俳句熱を高揚させていた。

二十八年の秋、子規が東京へ帰ってしまった後の松山に親しい

知人、友人を持たない漱石にとって、二十九年春に帰省して来た虚子は、同好の士として絶好の友であったのである。この時の交友は、先にも述べた様に二人で道後の温泉につかったり、俳句を作ったりしたものであるが、それは虚子が漱石を訪問したばかりでなく、漱石が虚子を誘い出すこともあった。「ゆつくり温泉にひたつ」た二人は帰りに虚子の提案で「神仙体の俳句」を作ろうと、「春風駘蕩たる野道をとほくと歩き乍ら句を拾」ったと言う。ここに言う神仙体とは、その頃虚子が囑外の主軸する雑誌「めざまし草」に俳句を載せるためにその材料として種々の題詠をしていた中の一題で、後には村上獭月にも勧めて出来上った三人の句を雑誌に発表したりしていた。この神仙体の俳句は、神や仙人に代表されるような現実から遊離した空想的、神秘的、浪漫的な世界を詠む事を主題としたもので、当時の虚子俳句が新傾向にあった事を示すものの一つである。

以上の様に、明治二十九年の松山に於ける漱石と虚子との俳句を中心とした交友にあつては、虚子が俳句に一日の長あるものとして主導権を持ち、漱石は虚子について俳句を作つては、單調な田舎での教師生活の中で作句に喜びと慰めを見出していたのである。

こうした二人の関係は、漱石が熊本第五高等学校へ赴任した後も文通の形で続けられる。

漱石は明治二十九年十二月五日、赴任先の熊本から東京の虚子

へ宛てて次の様に書き送っている。「来熊以来は頗枯淡の生涯を送り居候」「今日日本人三十一号を読みて君が書牘体の一文を拝見致し甚だ感心致候立論も面白く行文は秀でて美しく見受申候此道に従つて御進みあらば君は明治の文章家なるべし益御奮励の程奉希望候先日世界の日本に出たる『音たてて春の潮の流れけり』と申す御句甚だ珍重に存候子規子もものしたる君の俳評一読是亦面白く存候人事的時間的の句中甚だ新にして美なるもの有之候様に被存候然し大兄の御近什中には甚だ難渋にして詩調にあらざるやの疑を起し候ものも有之様存候（心安き間柄失礼は御海怒可被下候）所謂べくづくし杯は小生の尤も耳障に存候処に御座候」「まづしと云へば」「小生の如きは全く俳道に未熟の致す処実に面目なき次第に候過日子規より俳書十数巻寄贈し来り候大抵は読み尽し申候」「子規子近來の模様如何此方より手紙を出しても一向返事もよこさず多忙か病氣か無性か或は三者の合併かと存候小件地に罷在楽みとする処は東京俳友の消息（に）有之何卒爾後は時々景氣御報知被下度候近什少々御目にかけ候御ひまの節御正願上候」

この当時の漱石書簡の内容は、右の書簡からもわかるように、自分の生活の近況報告、東京での子規、虚子の文学活動への意見と激励、子規の病状伺いと自分の俳句に関わる近況報告、作品提示と斧正願いが主なものとなっている。

ここでわかる様に、この時代の漱石はあくまでも子規、虚子を

俳句の師と仰ぎ、自らは中央東京から遠く離れた熊本ので一教師として生活しながら、余技として俳句に関わり、その関わりの中から東京で俳句革新運動に命を賭して活動している子規の姿、俳句を中心とした文学活動に生きようとする虚子の姿を羨望をも含めた眼差しでながめていたのである。

この漱石から見た虚子との関係は、当時の虚子から漱石を見た場合も同様であった。虚子は後年、前掲の「漱石氏と私」の中で「実は其頃の私達は俳句に於ては漱石氏などは眼中になかったといつては失礼な申分ではあるが、それほど重きに置いてゐなかつたので、先輩としては十分に尊敬は払ひながらも、漱石氏から送つた俳句には朱筆を執つて○や△をつけて返したものであつた。そこで漱石氏の乱調に対する批難もそれほど重きを置かず、漱石氏が東京俳友の消息に憤れてゐるといふことに就いてもそれほど意をとめなかつたのであつた。」「後年は文壇の權威をもつて自任した漱石氏も、其頃は僅かに東京俳友の消息を聞いて、それを唯一の慰藉とする程度にあつたのだと思ふと面白い。」と回想している。

この様に、教師を本業として忠実に学校業務に当たり、また英文学者としての真面目な修養を積む事を本義としていた松山時代、熊本時代の漱石は、虚子を文学活動に生きる事を本義とする、文章に一日の長たる者として眺めていた。そして漱石自身は子規傘下に集まつた多くの門下の一人として別に意に介する所もなく、

子規に俳評を仰ぐと同様に虚子に対しても、虚子俳句に対する自分の意見は述べながらも、俳評を仰いでは満足するという位置に居たのである。

従つて明治三十一年十月、虚子が「ホトトギス」を東京へ移して発行した際、その原稿依頼に依じて漱石が寄稿した三編は、それぞれに英文学者としての漱石が、英文学的の評論を載せたものである。その三篇とは明治三十一年十一月、十二月に掲載された「不言之言」、三十二年四月の「英国の文人と新聞雑誌」、同年八月の「小説『エイルキン』の批評」の三編である。

これらの文章に解説を加えてみると、「ホトトギス」に最初に載せた「不言之言」は、「糸瓜先生」と号した漱石が、まず「われ平生巖巖として講筵に列し妄りに無用の舌を鼓して諸生を鬱惑す。朝より午に到り午より夕に至つて已まず。半夜少しく閑あれば好んで虚堂の裸に枯坐しつねに香一炷を爐中に焚て恭しく國王を拝して吾舌の完きを謝す」と自らの教師としての姿を自嘲し、「之を奈何ぞ舌を百里の外に動かして胡説乱説如麻如粟の種族を外道に引き込むに忍びんや。」と言ひながらも、「聞説方今驕旆あり到る所に翻り慢憶あり行く先に充つと。」といった事を条件に、「己みなかなか人は糸瓜の愚を嘲る。ふらり／＼として彼閑せざるなり。」「吾」「寧ろ糸瓜の愚を学ばんか。習して之を『はとゝぎす』に質す。『はとゝぎす』曰く法々華経。」「只一転語を下し得て恰好なりと思惟する勿れ。糸瓜亦自ら転身の一途なき

にあらず。」と次第々々に開き直りを見せ、ついには「糸瓜時に語り杜鵑時に法華を転ず是に於てか先生の駄弁あり。眼なきものは看よ。耳なきものは聴け。」と述べるに到って、本題に入っていく。

この「不言之言」に於ける枕の部分は、自らを「糸瓜先生」と号する事から、(「猫」に苦沙弥一派を糸瓜に見たてて猫が批評している箇所がある。)また、その語調といい、饒舌ぶりといい、アイロニーを含んだユーモアやパロディの用い方といい、処女作「吾輩は猫である」を髣髴とさせるものがある。

右の枕に続いて述べられた本文は、後の「草枕」を思わず様な「俳句に禅味あり。西詩に耶蘇味あり。故に俳句は淡泊なり、洒落なり。時に出世間的なり。西詩は濃厚なり何処迄も人情を離れず」という文章に始まり、西詩と俳句との比較を通して、両者の特色を述べると共に、俳句の立場から西詩を見た場合、西詩の立場から俳句を見た場合を述べ、とうてい両者の相容れないものである事を説明している。

続いて漱石は、「俳句は暫く措く」として、俳句の特殊性はさて置き、俳句以外の東西の文学を比べて見ると、そこに思いの外類似点の多い事を、物語上に見られる類似、ことわざ俚諺類の表現の類似、東西の故事典故の内容の類似、また人間精神を内面から支えるための宗教的、哲学的なものに見られる類似等々を、具体的な例証を示しながら解説している。

以上からわかる様に、「不言之言」は英語教師としての漱石が自分の得意とする英文学の知識を用いて、東西の文学(文章)に見られる類似点を示すことによって、西洋に類似のものを見出す事のできない、俳句「という文学の特色、その日本の文学としての独自性を俳句雑誌「ホトトギス」誌上で強調して見せたものと言えよう。

次に「ホトトギス」に掲載された「英国人と新聞雑誌」はその題が示すように、英国の文人と新聞雑誌との関係を述べたものである。

まず「一般に文学者と呼ばれ又自ら文学者と名乗る者は独りで述作をして独りで楽しんで居る様な者は極めて鮮い。況んや文を売つて口を糊するといふ場合に至れば必ず何かの手段を以て世の人に自作を紹介し様と企てる。新聞雑誌は此紹介物として頗る便利なるものであるからそこで文人と新聞雑誌との関係が生じてくる。此関係を不秩序ながら少し述べ様と思ふ」と始めた漱石は、英国新聞の起源を述べ、次いで十八世紀初に出た最も初期の文学雑誌二編、「タトラ」(Tatler)と「スペクテーター」(Spectator)の、短命であった内にも果たした役わりを論じている。中でも雑誌「スペクテーター」の文学上の趣味が、それまでの政治一辺倒の新聞雑誌の中にあって、当時の人々に非常な人気をもつて迎えられた事を述べ、文学雑誌の端緒を開いたとしている。その後半世紀を経て十八世紀末から十九世紀初にかけての文学勃興期に乗じて、新聞雑誌も

次第に文学的に傾き、「評論は勿論詩歌小説に至る迄が此利器を藉つて世間に紹介さるゝ様になつた」としている。そして「其勢は滔々として今日迄進で来たが毫も退く景色がない」と結び、その勢力の一部を面白い逸話、滑稽話、一風変つた作家のこぼれ話などを中心にして、具体的な文学者名、作品名を挙げながら事おもしろく説明している。

以上、漱石自らが文末にまとめているようにこの一編は、英国で新聞のでき初めの頃は「皆政治的のもので」「文学的趣味に乏しかった」「が段々発達して有ゆる種類の文学が新聞雑誌の厄介になると云ふ時代になつた。是に連れて文学者と新聞雑誌との関係が漸く密切に成つて来て現今では文学者と新聞雑誌との関係を持たないものはない様になつた」という、英国に於て文学が如何に新聞雑誌の中へその勢力を拡大して行つたかを歴史的に説明したものである。

この一編も前編と同様に、英文文学者としての漱石が英文学の修業の中で見出した英国文学とジャーナリズムとの関係を、日本のジャーナリズムとして数少ない文学雑誌、それも当時唯一の俳句雑誌として勢力を伸ばしつつあった「ホトトギス」誌上に示したものである。

続いて同年八月に掲載された「小説『エイキン』の批評」は、その頃英国で大流行し、米国と合わせて三万三千部売れたという当時のベストセラー、ヨッツ・ダントン著『エイルキン』という

小説についての梗概と、なぜこれ程までの人気を博し得たかの分析として、登場人物、舞台背景、結構、文体の繁簡に対する批評を述べたものである。

この一編も、その冒頭文に「子規も虚子も病気で健筆を抑ふ事が出来ぬと云ふので例の如く漱石に何でも書けとの注文であるから、何か書かずばなるまい。元来英文学の評判を俳句の雑誌に載せても、興味に乏しいのみならず、多数の読者には嫌厭を来すの恐れある許とは思ふが、是も主筆が病氣である以上は、朋友への義理だと諦めて、黙つて居り玉へ」と前置きしている様に、英文文学者として英国文学の主な新刊行物には必ず目を通していた漱石が、当時評判となつていた英文学の作品を紹介して見せたものだったのである。

以上の様に、第五高等学校の英語教授であつた漱石が、「ホトトギス」を発行し始めた虚子の求めに応じて明治三十一、二年に発表した文章は、三編ともに英文文学者としての漱石が英文学の知識の一端を披露したものであつて、それらは俳人でも写生文家でも、ましてや小説家でもない英文学の教師としての漱石の文章であつた。

四

明治三十三年五月、漱石は文部省から英語研究のために二年間のイギリス留学を命ぜられる。七月熊本から東京へ一旦帰京し、

九月留学の途に上った。

漱石は途中香港から虚子にあてて、船酔に参っていること、西洋臭さに早くも食傷している事などを書き送っている。又、明治三十四年二月二十三日にはロンドンからビクトリア女王の葬儀の模様と、当時の自分の心境とを俳句で綴った手紙を送っており、これらはそれぞれ「ホトトギス」に掲載されている。

漱石が留学の途に上って以来、子規、虚子宛に書き送った書簡類は右の二通を含めて計七通であるが、それらは全てその都度「ホトトギス」に掲載された。その中で最も圧巻であるのが、明治三十四年四月九日、同二十日、二十六日の三日間に亘って書き送られた三万字に余まる長文の手紙である。そしてそれは同年の五月と六月の「ホトトギス」に「倫敦消息」と題して掲載された。

この手紙は「どうかして一度は洋行して西洋の文明に接して来たい」という強い希望を持ちながら、此頃にはすでに立ち上る事さえできなくなり、病床に臥したままになっていた子規からの、「自分を慰めるために何か書いて呉れ」という依頼に答えて、漱石がロンドンでの自分の生活状況を詳細に書き送ったものである。この手紙を眺めてみると、まず九日の手紙では留学生活での勉強に忙がしく、何処へも無沙汰をしている事の詫びを述べながらも「倫敦といふ世界の勤工場の様な馬市の様な処へ来たのだから時々は見えた事聞た事を君等に報道する義務がある是は単に君の病気を慰める許りでなく虚子君に何でもよいかからいて送つて呉れろ

と二三度頼れた時にへい／＼よろしう御座いますと大堀に受合つたのだから手紙をかくのは僕の義務さ」と始めている。ここでわかる様に漱石の手紙は子規のためだけに書かれたものではなかった。手紙を書き始めた漱石の頭には、虚子の依頼にも答え得るものを書こうという考えがあった。即ち「ホトトギス」誌上に掲載される事を予期して書いた書簡本文章なのである。

従つて漱石は、報知したい事はたくさんあるが、英国の文化文明に接して考える様になった自分の考えなどは聞きたくもない事だから、「今日起きてから今手紙をかくて居る迄の出来事を『ほととぎす』で募集する日記体でかくて御目にかけよう」と前置きして、朝目をさますところから、昼前にクレイグ先生を訪問するまでを、自分の行動を追いながら、その周囲に存在するものに低徊しつつ、それらの物事の様子、特色を微に入り細に入つて描出して見せている。

その低徊ぶりを整理してみると、シャッターの隙間からさし込む朝日の眩しさに目をさました漱石は、枕の下から時計を引きずり出して七時二十分である事を確かめる。この下宿の起床時間までには充分時間の余裕があるため、そのままベッドに横になったままで「起きたつて仕方がないが別にねむくもない。そこでぐりと壁の方から寝返りをして窓の方を見てやつた」と自分の動作を描写した漱石は、ベッドの上の自分の位置に視座を据えて周囲を見回す。「窓の両側から申訳の為に金巾だか麻だか得体の分ら

ない窓掛が左右に開かれて居る」と窓掛の様子をとらえ、次に視点を移動させ「天井」の様子と、階上から聞こえる物音について述べた後、「今度は天井から眼をおろしてぐる／＼部屋中を検査した」と自分の下宿部屋の様子を、筆箭から「カル、ス」泉の瓶↓手袋↓靴↓膨大な書物の山へと視点を移動させ、視点の捉えた対象ごとに細かい説明をほどこしている。

続いて「第一の銅羅」が鳴り、起き上がった漱石は「寝台を離れて顔を洗ふ台の前へ立つた」自分の動作を述べ、朝の洗面の様子を、水を金盥へ満たすところから↓服薬↓洗面↓髪剃↓整髪↓着替えに至るまで事細かに描出する。

次は食事の様子である。第二の銅羅で食堂に降りた漱石は食卓の上に並べられた朝食をオートミール以下ベーコン、玉子、焼パン、茶と説明した所で、同宿の下宿人田中君が降りて来て同席する様子を述べた後、食卓にあった招待状を開け、英国で招待される事の不平を洩らす。田中君が会社へ出勤した後、漱石は新聞に低徊して興味ある記事を紹介。そうこうする内に十時二十分となり、クレイグ先生の所へ出掛ける仕度に三階の自室へもどり仕度の整った後、十時四十分から五十五分まで再び新聞の興行案内に低徊。いよいよ下宿を出て下町の先生の所へ出掛けた漱石は下町までの道筋を、駅までの十五分の道のりから、↓停車場の「リフト」↓地下の様子↓汽車の中↓乗換↓two pence Tubeの中まで、自分が移動して行くに従ってその場その場で観察できる

物事に、それぞれに低徊してはその様子を詳しく写し出して見せ、最後に「平凡な乗合だ。少しも小説にならない」と四月九日の手紙を結んでいる。

この手紙は漱石が最後に「少しも小説にならない」と述べている通り、小説らしい事件や、人情の機微や葛藤などは少しも書かれていない。極めて平凡で平均的なロンドンの日常生活の中で、漱石の目に映ったものを順次に捉え、詳細に観察した結果（観察）を読者に正確に伝わる様に表現したものであった。

漱石は同じ文章方法で、二十日の手紙では西洋の大都市ロンドンにおける外国人（黄色人種である日本人）としての自分の姿と周囲の英国人の姿。ロンドンの安下宿に定住する事になったいきさつと、そこでの窮乏生活。下宿屋の主人夫婦とその妹の人物像を描写して見せる。

また二十六日の手紙では、下宿に働く下女ペンのコックネーでの能弁ふりと、破産したこの下宿屋に差し押えにやって来る差配人とこの屋の人々との応対ふりとをまぜ合わせて写し出して見せている。

これらの文章を漱石は、先にも引用した通り「日記体」であるとして書いたのであるが、この漱石の「日記体」の文章を虚子は「倫敦に於ける下宿屋生活の模様を詳細に写生して来た（「漱石氏と私」傍点筆者）」ものと評した。即ち、虚子はこの「倫敦消息」を、詳細に観察した結果を読者に正確に伝わるように表現した。

文章形態であるとし、写生文と見做したのである。

そしてこの文章は病床の子規を大変喜ばせた。この喜びを子規は漱石宛の書簡で次の様に語っている。「ヨコシテクレタ君ノ手紙ハ非常ニ面白カッタ。近來僕ヲ喜ベサセタ者ノ随一ダ。僕ガ昔カラ西洋ヲ見タガツテ居タノハ君モ知ツテルダロー。夫ガ病人ニナツテシマツタノダカラ残念デタマラナイノダガ、君ノ手紙ヲ見テ西洋ヘ往タヤウナ氣ニナツテ愉快デタマラヌ。若シ書ケルナラ僕ノ目ノ明イテル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ(明三四・二・六)子規が漱石の手紙を喜んだのは「西洋ヘ往タヤウナ氣ニナツ」だからである。「西洋ヲ見タガツテ居タ」子規に、漱石の文章はあたかも実際に自分の目で西洋を見ているかの様な氣にさせたのである。それはこの手紙が写生文の特色を遺憾なく發揮した、上乘の写生文で書かれていたからであった。

この事は言い換えれば、「倫敦消息」は漱石の写生文家としての才能を顕現させたものであり、更に言えば、この「倫敦消息」によって写生文家漱石が誕生したとも言えるのである。そして、この写生文「倫敦消息」は、虚子が「此『倫敦消息』は後年の『吾輩は猫である』をどことなく彷彿せしめるところのものがある。(『漱石氏と私』)」と述べている様に、その後の漱石の文章に大きな影響を与え、小説家漱石の初期作品のさきがけとなるもの、と言っても良い文章であった。

この文章を喜んだ子規は漱石に、「僕ノ目ノ明イテル内ニ今一

便ヨコシテクレヌカ」と頼んだ。子規は漱石が写生文に写し出すロンドンの様子を見たかったのである。漱石は十二月十八日、日曜日の「ハイド・パーク」の有様と、「セント・ジェームス・ホール」での格闘試合の模様と、再度引越しをした先の主人の老夫婦の事とを写して送っている。この手紙はおそらく先の子規書簡の要望に答えるために書かれたものと思われる。

しかし留学生としての勉強に寸暇を惜しんで取り組んでいた漱石は、これ以上の手紙を子規に送ることはなかった。明治三十五年九月十九日、漱石がロンドンに居る間に子規は死んでしまった。その死を報じた虚子からの手紙に答えて、漱石が子規追悼の句と共に書き送った書簡は、翌年二月の「ホトトギス」に掲載されている。

以上のようにロンドン留学時の漱石と虚子との関係は、ロンドンという世界の大都市を目の当りにしている漱石が、その様子を書簡に書き送り、それを虚子が「倫敦消息」として「ホトトギス」に掲載するというものであった。つまり二人の交友を通して「倫敦消息」は生まれ、「倫敦消息」を執筆することによって漱石は自らの内にあった写生文家としての才能を迸出する契機を得たのである。そしてこの写生文執筆という事は、漱石が小説家として誕生するためにはなくてはならない過程であった。

明治三十六年一月、帰国した漱石は第一高等学校講師兼東京帝國大學講師として東京に在住することになる。漱石の東京帰郷によって漱石と虚子との交友は、再び直接に結ばれ、深められてゆく。

虚子は以前子規が「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」「連俳に貴ぶ所は変化」で「変化は則ち文学以外の分子」であるとして否定した連俳に対して肯定的見解を持っていた。そこで子規没後、再び連句研究を始め、その成果を「連句論」として「ホトトギス」に掲載した。

そしてこの虚子の連句肯定論を漱石は支持したのである。その時の事を虚子は、「明治三十七年の九月に漱石氏を訪問して見ると席上に四方太君も居った。話が連句論になった時に、鳴雪翁や碧梧桐の連句反対論に対して氏は案外にも連句賛成論者であつた。四方太君もまた賛成論者の一人であつたので三人は忽ちその席上で連句を試むることになった。（「漱石氏と私」）と述べている。この連句作の経験がもとになって、漱石と虚子とは共に「俳体詩」を試みるようになる。この「俳体詩」とは虚子が、連句の世界は人生の断面図であるとの見地から「連句をして一貫した作品であらしめる」新詩を考え、それを「俳体詩」と呼んだのである。

こうした状況の中で、虚子が提案し漱石がそれを受けて忽ちにして出来上ったのが長篇俳体詩「尼」である。作品は明治三十七年十一月、十二月の二ヶ月に亘って「ホトトギス」に掲載された。

この俳体詩「尼」を眺めてみると、この作品は、尼々から連想される事柄を次々につないで行って、一人の尼を主人公とする物語を作り出したものである。

形式は、最初の八句までは虚子、漱石が交互に一句づつ、五七五、七七の単位で展開させて行っているが、九句目から二十四句目までは四句単位で両者が交代で詠み、二十五句目から三十二句まで漱石が独りで八句連続して詠んだ所で十一月分は終わっている。十二月分として載せられた「尼」の後半部には、定まった形式はなく、両者のイメージの湧くのにまかせてどんどん詠み進められている。その結果最初の二句を漱石が詠んだ後、虚子が独りで十二句続け、四十七句目からは漱石が独りで二十二句詠んでいる。ここで虚子と交代し虚子が四句程詠むが、再び漱石が連続して十六句詠み、八十九句目から八句虚子が詠んで九十六句で挙句としている。

右の分析からも知られるように、この「尼」の創作に当たっては、特に後半部では漱石の独壇場になりがちであった。この時の二人の両吟の様子を虚子は、「漱石氏の句は華やかな、調子の高いもので、殊に私がまご／＼して附け兼ねている間に氏はグン／＼と一人で数句並べたてゝ行つた。（「漱石氏と私」）」「私は全くワキ役でありまして、主として漱石の天才的な閃きがシテ役として活躍し（「俳句の五十年」）たと回想している。

それでは漱石が思ひき切って詠み續けた「尼」の内容はどの様

なものだったのだろうか。「尼」の世界を眺めてみると、十一月分の、連句、連句的俳体詩というあり方で詠み進んでいた段階では、尼の内面は描かれる事なく、物語としての場所、時間、風景、尼の生活といった外面的な描写が主となっている。これに対して十二月分では、虚子が漱石の三十四句目の「落ちて椿の遠く流るゝ」を受けて、梅によって尼の恋心を再燃させ、死んだ筈の夫の名を鳥がもたらした矢文に見出すという展開をさせた辺りから、尼の内面へと描写が移り、漱石の句にも感情の流露が見え始める。漱石は虚子の描き出した、尼の切迫した感情表出を受けて、その恋慕の情を「狂恋」としてとらえ、「物狂ひ可笑しと人の見るならば」と、物狂の情を表白する。そして続く句では、意味が不明瞭になることも気にもとめず、氣息にのせて尼の狂の内面を描き出し、更にはその尼の内面に自分の内面を重ね合わせて、「夜といへる黒きものこそ命なれ／色を隔てゝ鈍き脈搏つ／我を呼ぶ死手の鳥の声洩れて／怪しき星の冥府に尾を曳く」と不気味な暗い自己内面を直截に、物語の展開とは無関係に表出してみせ、「尼」を結んでいる。

この「尼」の後半で見せた漱石の内面表出は、漱石が自己の内面を、客観視を機能として持つ五七五によって点の連続として把握できたという事を示している。つまり短詩定型の一句の機能が、それまで表現の契機を持たなかった漱石の内面の言語化を可能にしたのである。この事は「漱石の内に鬱積してをりました創作熱

とでもいふべきものかもしれない」とするならば、それはこの俳体詩によつてはけ口を見出したといつてもいい」という虚子の指摘が示すように、漱石のその後の小説的内容が俳体詩で形を持ったということである。つまりこの俳体詩「尼」は、その創作に於て「天才的な閃き」を示し、「シテ役として活躍」した経験が漱石に「徐々に創作に対する自信を持」たせ、「俳体詩の試みは、漱石をして文壇に崛起せしめるやうになつた過程の一つの出来事であつたといふ点で記憶すべきことであると考える。（「漱石氏と私」）と虚子が述べている様に、創作家漱石が生まれるために重大な意味を持つ文学体験であつたと言えるのである。

こうして漱石は、「ボトトギス」の日記体の文章形態という考えから「倫敦消息」を得、「倫敦消息」を書くことによって写生文の方法を獲得し、また「尼」に代表される俳体詩の創作から自己の内面を表出するを経験し、次第々々に小説家としての素地を築いて行つたのである。そしてこれらの文学体験の延長線上に作家漱石の誕生がある。

以上述べて来た様に、虚子は「吾輩は猫である」を漱石に書かせる直接のきっかけを作つたこともさる事ながら、それ以前の漱石に、その交友を通してあらゆる機会に、様々な面で小説家夏目漱石を生み出すための基礎作りの役割を担つた人物と宮つて良かった。

（岡山県立備久高専学校教諭）